

パレスチナ暫定自治区



大イスラエル構想（太線で囲まれた地域）



けですが、かつてのソ連のときと同じよう

あげて「ウクライナ軍」を支援しているわ

士」の代わりに、NATO諸国が総力を

この戦争では、「ムジャヒディン（聖戦

き出されて今でも戦争が続いています。

同じことが、こんどはウクライナの地で

おこなわれ、ロシア軍はウクライナにおび

なったと言われています。

ソ連という社会主義国家が崩壊する一因と

戦わせました。

この10年近く続いた戦争でソ連は疲弊し、

ジャヒディン（聖戦士）」という名のイス

ラム原理主義者集団を育て上げ、ソ連軍と

戦わせました。

たたとえば、かつてソ連が、アフガン政権の要請で軍をアフガニスタンに侵攻させたとき、アメリカは「ム

しかし、このような事実は「知る人ぞ知る」で、すでに多くの論考が現れています。

ました。

以上みてきたように、アメリカは「マッチポンプ作戦」「Devide and Rule 作戦」を常套手段としてき

ました。

13

NHK

ヨルダン川西岸地区「ファタハ」

ガザ地区「ハマス」

パレスチナ暫定自治区

Israel's Borders

SAUDI ARABIA

Riyadh

Medina

Yanbu al Bahr

Abu Dhabi

Dhahran

Al Jubayf

Al Bahariya

Al Rajzah

Abdullah

Kuwait

Abdullah

Abdullah

Abdullah

に、ロシアが崩壊することになるかは今のところ分かりませんが、むしろロシアに対する経済制裁の「ブーメラン効果」で欧米諸国が経済崩壊する危険性すら出ているからです。

14

私は先に「アメリカに支援されて、イスラエルがイスラム原理主義勢力『ハマス』を育て上げ、自分の権力を維持するために利用してきたことは間違いないでしょう」と書きました。

このことは、元イスラエル情報機関「シムベト」長官アミ・アヤロン氏が、NHK国際ニュースナビ(二〇二三年一〇月二四日)のインタビュでも明言したと、さきに紹介したとおりです。

しかし、「ムジャヒディン」が名前をすげ替えられて「アルカイダ」となり、それがさらに変貌をとげて「イスラム国」(ISIS)という名前で、アメリカによる世界支配の道具になっていることは、あまり知られていません。

それを詳述したのがクリス・カンサンによる次の論考です。

(1) Islamic Terrorism: Our Ally For 38 Years (イスラム・テロリズム——38年来の同盟者)
<https://worldaffairs.blog/2017/05/28/embracing-islamic-terrorism/> Chris Kanthan

(2) US and Allies Created, Funded, Armed ISIS (アメリカと同盟国はISISを創設し、資金を提供し、武装させた)
<https://worldaffairs.blog/2017/05/09/us-and-allies-created-funded-armed-isis/> Chris Kanthan

上記の2つの論考はほぼ時期が同じです。前者は題名が「イスラム・テロリズム…38年来の同盟者」と

なっているように、アメリカが「イスラムのテロ組織」「イスラム原理主義勢力」と38年間も同盟者として扱われてきたこと示しています。

この論考が発表されたのは二〇一七年七月五日ですから、その「38年前」と言えば、まさにアメリカによって組織された「ムジャヒディン（聖戦士）」によってソ連軍がアフガンに引きずり込まれて、10年近くも闘って撤退した時期と重なります。

一方、「タリバン」は、イスラム教の神学校「マドラサ」で学んでいた学生が中心となって結成された組織です。マドラサで学ぶ学生はアラビア語で「タリブ」と呼ばれ、現地のパシトゥー語の複数形が「タリバン」です。

みずから名乗ったのではなく、勢力を拡大していくうちにメディアなどを通じて「タリバン」という呼び方が定着していきました。彼らは戦争で混乱したアフガンをイスラム教の教えに従って立て直そうとしました。

こうして出来上がったのが「タリバン政権」でしたが、元の世俗的社会主義政権からみれば、女性の学習権・参政権も大きく制限されて、「発展途上国」へと転落することになりました。

他方、全世界からかき集められたイスラム原理主義勢力「ムジャヒディン」は、再編成されて「アルカイダ」となります。この間の経過は、上記記事(1)に詳しいので、項を改めて詳しく説明をすることにします。

さて「アルカイダ」なるものの活動が世界中に広まって行くには2つの要因があったとカンサン氏は述べています。それを彼は次のように説明しています。

ムジャヒディンを語る上で忘れられがちな2つの重要な要素がある。世界中から集まった外国人戦闘員とイスラム原理主義者だ。

一九八〇年代、いわゆるアラブ系アフガニスタン人3万5000人以上が、ロシア人と戦うために世界中から集まったが、イスラム教、カリフ、聖戦という概念をアピールしなければ、彼らをその気にさせることはできなかっただろう。

「アラブのために戦え」は「X国のために戦え」よりもはるかに効果的だ。宗教に動機づけられた戦闘員は、死を恐れないので、戦場でも非常に役に立つ。このような考え方は自爆テロに不可欠である。自爆テロなしには、多くの戦闘や戦争が勝利することはなかっただろう。と同時に、私たちはサウジアラビアから、優秀な兵士を作るには教化が不可欠であることも学んだ。



ホワイトハウスに招かれたムジャヒディン（イスラム聖戦士）
<https://worldaffairs.blog/2017/05/28/embracing-islamic-terrorism/>

そこでCIAは、アフガニスタンの子供たちにジハード、武器、ロシア人に対する憎悪の概念を紹介する賢い教科書を作った。

アフガンの小学校で使われた教科書は、アルファベットも「ジハード」の精神で編集されていました。

ちなみに、イスラームの文脈では「ジハード」とは「宗教のために努力する、戦う」ことを意味します。

たとえば「CIAが資金を出して作った小学校1年生用の教科書」(下図)には次のような説明が付いています。(下線「傍線」に注目)

A is for Allah.

A はアラーの A

J is for Jihad-jihad in an obligation.

J はジハードの J。ジハードは義務。

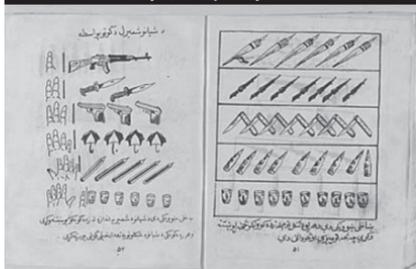
T is for Tufang (rifle) - My father buys rifles for Mujahideens.

T はライフルの T。父はムジャヒディンの為にライフルを買います。

D is for Din (religion) - Our religion is Islam. Russians are the enemies.

D は宗教の D。我々の宗教はイスラム教です。ロシア人は敵です。

US-published, CIA-sponsored textbooks for 1st grade Afghan kids in 1980s



A is for Allah

J is for Jihad - Jihad is an obligation

T is for Tufang (rifle) - My father buys rifles for Mujahideens

D is for Din (religion) - Our religion is Islam. Russians are the enemies

サウジアラビアは石油で儲けたお金がいくらでもありますから、このような活動を世界各地で繰り広げました。それをカンサン氏は次のように述べています。

それ以来、サウジアラビアは世界中のイスラム学校（マドラサ）に数十億ドルを費やしてきた。これらの学校は、将来の活動家、過激派、戦闘員の温床となっている。

サウジアラビアはまた、世界中で使用される教科書を印刷している。子供たちは、「シーア派、キリスト教徒、ユダヤ教徒を殺せ」といった愛に満ちたメッセージを学ぶ。世界中のサウジのモスクや説教者たちも、過激派のメッセージを広め続けている。

16

さて、このような動きのなかで、イスラム主義を掲げる国際テロ組織「アルカイダ」もつくられました。

つまりムジャヒディンをモデルにした組織を世界的規模でつくり、アフガン以外にも輸出したらどうかという考えがCIAの頭に浮かんだというわけです。

Madrasahs (Islamic Schools) Around the World



それをカンサン氏は次のように述べています。

アフガン戦争に勝利しそうになったとき、ムジャヒディンのプロジェクトが世界の他の地域でも再現可能な見事な脚本であることに気づいた。

アルカイダが結成されたのはその時だ。完璧なタイミングだった。

アメリカの巨大石油会社ハリバートンはカスピ海付近で巨大な石油埋蔵量を発見したばかりだったが、その周辺諸国はソ連崩壊後も親ロシア派ばかりだった。

アメリカ国民が知らないうちに、ムジャヒディンは一九九〇年代を通じてボスニア、コソボ、アゼルバイジャン、ウズベキスタン、タゲスタン、チェチェンなどで非常に活発に活動していた。これらの戦闘員は、主に3つの目的で使用された。

- ① 親ロシア派の政権を打倒し追放する。
- ② 石油・ガスパイプラインの建設に協力し、米軍基地の受け入れに同意する親欧米の人物を、政権指導者にする。
- ③ ロシアのパイプラインやその他の利益を妨害する。

これを読むと、私たちの知らないうちに、「アルカイダ」が旧東欧を荒らし回っていたことに気づかされます。

旧ソ連の勢力圏だったところが、ことごとく「アルカイダ」の活動地域になっていたのでした。カンサン氏の簡潔にして要を得た説明は次のように続いています。

アゼルバイジャンは簡単で、我々は一九九三年に利用できる人物を手にした。グルジアは時間がかかったが、ジョージ・ソロスと彼のカラー革命によって、二〇〇五年にようやくわれわれの男が誕生した。

一年以内に、アゼルバイジャン（カスピ海）、グルジア、トルコを結ぶ10000マイルのパイプラインができた！

チエチェンは部分的に成功した。彼らはロシアからの独立を求めて奮闘していたため、サウジの資金とアメリカの武器もたくさん持っていたムジャヒディンを喜んで歓迎した。短期間のうちに、チエチェンの支配的宗教勢力だった「非暴力で神秘的なスーフイズム」はサウジのワッハブ主義に乗っ取られた。

アルカイダはロシアのパイプラインを爆破し始めた。ロシアは一九九四年にチエチェンに侵攻し、戦争に敗れて撤退した。アメリカは当時のニュースを見るのは楽しかったに違いない。

しかし、その3年後にプーチンが首相に就任し、ジハード主義者と無慈悲な戦争を繰り広げ、決定的な勝利を取め、二〇一八年、チエチェンに自らの強権者を据えた。



旧東欧、バルカン半島の石油パイプライン

<https://worldaffairs.blog/2017/05/28/embracing-islamic-terrorism/>

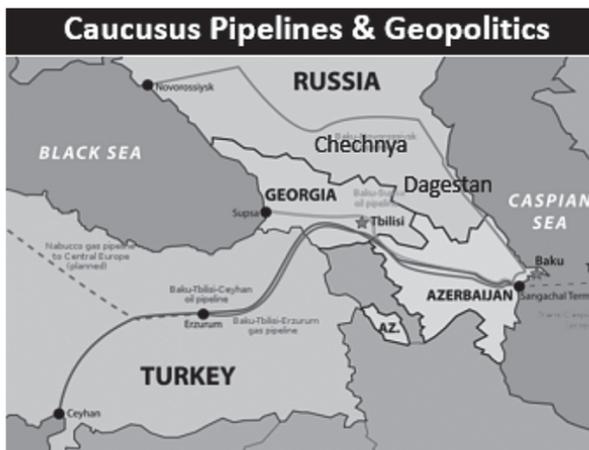
スーフィズムでさえ最近大きな復活を遂げ、チェン人はワットハーブ主義とジハード主義を拒否するようになった。

私はチェチェン情勢がよく分からなかったのですが、これを読んでやつとチェチェンがどのような経過を経て現在に至っているのかが初めて分かった気がしました。ブーチン政権が登場しなければ、チェチェンはアルカイダの巢窟になったままだったわけです。

17

このように、CIAの指導に従って旧ソ連圏・旧東欧を荒らし回った「アルカイダ」でしたが、彼らは再び中東に舞い戻り、シリアだけでなくリビアなどアフリカにまで手を伸ばすようになっていきました。再びカンサン氏の説明を聞きましょう。

アルカイダはボスニア、アルバニア、マケドニア、コンボで非常に役に立った。一九九〇年代後半には、セルビアの親ロシア派を排除するために、でっち上げの罪状とNATOの爆撃を利用した。



旧東欧、コーカサスの石油パイプライン

<https://worldaffairs.blog/2017/05/28/embracing-islamic-terrorism/>

ユーラシア大陸の中心部から離れたアフリカ、中東、アジアでは、イスラム過激主義とテロリズムが地政学的な変革を促す大きな役割を果たしている。

リビア、シリア、イエメン、ソマリアでは、ムスリム同胞団、アルカイダ、サラフィスト（イスラム教スンニ派の極端な原理主義を信奉する人々）に依存している。

リビアでは、リビア・イスラム戦闘グループ (LIFG) というアルカイダ傘下の組織を利用した。

我々はそのリーダー（ベルハジ）をCIAの刑務所から釈放し、彼に素敵なスーツを着せ、ジョン・マケインとの写真撮影を手配し、彼は「残忍な独裁者」カダフィと戦う自由の戦士となった！

これを読んで驚いたのは、アメリカの支配者から「残忍な独裁者」というレッテルを貼られたリビアのカダイフィ大佐を惨殺するために送り出され人物が、素敵なスーツを着せられ、ジョン・マケイン上院議員との写真撮影まで手配されて、CIAの刑務所から送り出されたという事実でした。

カダフィ大佐は調べれば調べるほど「残忍な独裁者」とは全く違った実像が見えてくるのですが（アフリカを欧米の支配から独立させるための独自通貨の提案）など、それはさておいても、CIAの刑務所から釈放されたベルハ

abc NEWS

From Terror Group Founder to Libyan Rebel Commander

By LEE FERRAN and RYM MOMTAZ
Aug. 29, 2011

Aug 2011

Washington's Al Qaeda ally now leading ISIS in Libya

By March 11, 2015

March 2015



マケイン上院議員（写真右）と一緒に写真撮影された、リビアのテロリストのベルハジ

ジと一緒のマケインの写真ほどおぞましいものはないでしょう。

マケインと言えば、ウクライナ「尊厳の革命二〇一四」でも、クーデターに乗り出そうとする民衆に向かつて壇上から激励の挨拶を送っている厚顔無恥の人物ですが、カタフィ惨殺にあたってこんな役割を果たしていたとは！ その意味では、この写真も貴重な一枚だと言えそうです。

そもそもアメリカのワシントンDCやニューヨークで「占拠」運動 (Occupy Movement) がおこなわれていたとき、もしも中国やロシアの外交官や国会議員が壇上で激励演説をしたり、クッキーやドーナツなどの差し入れをした場合、アメリカ政府はこれにたいしてどのような態度をとるでしょうか。

これは、アメリカという国の傲慢不遜ぶりを絵に描いたような行動や写真ではないでしょうか。

18

さて「アルカイダ」の活動は、今やアフリカやアジアにまで広がってきています。たとえばナイジェリアの「ボコハラム (Boko Haram)」、フィリピンの「アブ・サヤフ (Abu Sayyaf)」、中国の「ウイグル・テロリスト (Uyghur Terrorists)」などです。

このように、「アルカイダ」は活動場所にに応じて名前を変えています。たとえばシリアのアサド政権を転覆するために使われたのがISIS (イスラム国) でした。このISISについて詳しく分析しているのが先述の(2)の論考でした。以下にこれを再録しておきます。

* US and Allies Created, Funded, Armed ISIS (アメリカと同盟国がISISを作りだし資金提供し武装させた)
<https://worldaffairs.blog/2017/05/09/us-and-allies-created-funded-armed-isis/> by Chris Kanthan

この論考は次のような書き出しで始まっています。

アメリカとその同盟国が I S I S を支援しているという考えは、ほとんどの人にとって衝撃的であり、多くの痛みを伴う認知的不協和を生み出す。即座の反応は、*ありえない*、*陰謀論だ!* というものだろう。

しかし、すべての証拠は議論の余地のないものであり、私たちの前に明らかにされている。それをつなぎ合わせるだけなのだ。

シリアのアサドを打倒するために、アメリカのエリートたちは公然とアルカイダや I S I S を武装させることはできなかった。そこで登場するのがサウジアラビアとカタールだ。

この2カ国はアメリカから武器を購入し、主にトルコ、一部はヨルダンを経由してシリアのテロリストたちに輸送する（トルコは北でシリアと国境を接し、ヨルタンは南で国境を接している）。

アメリカ政府のトップはみな、I S I S に資金を提供するサウジアラビアとカタールの役割を知っていたし、認めていた。

例えば、ヒラリー・クリントンは、選挙運動マネージャーのジョン・ポデスタに、「カタールとサウジアラビアは、I S I S とこの地域の他のスンニ派過激派グループに対して、秘密裏に資金援助と後方支援をおこなっている」とメールで書いている。

右では「例えば」の例としてヒラリー・クリントンの言だけをとりあげましたが、このあとには大統領ジョー・バイデン、統合参謀本部議長マーティン・デンプシー、NATO司令官ウエズリー・クラーク将軍などが、同趣旨の発言をしたことを紹介しています。

それどころかD I A（国防情報局）の幹部は二〇一二年、国防総省のメモで、次のように警告しました。

「シリアの反体制派は主にムスリム同胞団、アルカイダ、サラフィスト（ISISのようにイスラム教スンニ派の過激グループ）で構成されているため、アメリカはシリアの反体制派への武装をやめるべきだ」

ところが当時の大統領オバマは「彼らは穏健派だ」と主張して、このD I A長官を解雇してしまったのです。このD I A長官の発言は「よほど都合な真実」だったでしょう。逆に言えば、ISISがシリア大統領アサド打倒のためには欠かせない存在だったということです。

17

さらにカンサン氏の論考は次のように続いています。

さらに奇妙なことに、アメリカとイスラエルとともに、ISISを肯定的に見ていることを認めている。イスラエルとISISの関係が疑わしいことこの上ないことは言うまでもない。

ジョン・ケリーは国務長官として、アメリカが交渉の際にシリア大統領アサドに対する梃子としてISISを利用しようとしたこと



「穏健派」のISISがシリア兵の心臓を食べたり、10歳の少年の首を切って誇示している
<https://worldaffairs.blog/2017/05/09/us-and-allies-created-funded-armed-isis/>

を認めた。ケリーは、同じ発言の中で、アメリカがいかに多くの資金と労力を費やしてアサドを打倒したか、そしていかにプーチンがやってきて ISIS を弱体化させたかについて語っている。

イスラエル国防相はインタビューで、ISIS がイスラエルを攻撃したのは一度だけだが、ISIS はすぐに謝罪したと語った！

考えてみれば、これはいろんな意味で異常な発言だ。

多くの人が、ISIS は「イスラエル秘密情報部 (Israeli Secret Interference Services)」の略だと言うのも領^{えり}ける。

ここで興味深いのは、ケリー国務長官が「アメリカがいかに多くの資金と労力を費やしてアサドを打倒したか、そしていかにプーチンがやってきて ISIS を弱体化させたかについて」語っていることです。

アサド大統領は ISIS による攻撃に堪り兼ねてロシアに援助を要請したのですが、プーチン大統領はみごとにこの要請に応じて ISIS を駆逐したのでした。ロシア軍は、



シリアを巨大な戦車や砲撃部隊で我がもの顔に跋扈する ISIS

アメリカによる最新兵器で武装されたISISを敗北させたのですから、この事件はロシア軍の兵器の優秀さと戦術の見事さを世界に示すものとなりました。

もうひとつここで興味深かったのは「ISISがイスラエルを攻撃したのは一度だけだが、ISISはすぐに謝罪した」という事実です。

表向きはISIS＝過激派イスラム集団ということになっていっているのですから、イスラエル軍も放置するわけにはいかず「かたちだけでも」攻撃するふりをしたのでしょうが、ISISも思わずそれに反撃することになったのでしょうか。

しかし裏ではこれまでISISとイスラエル軍は「友軍」として行動してきたのですから、謝罪せざるを得なくなつたというわけです。さもないと今後は「友軍」として扱ってもらえなくなる恐れがありますから。

それにしても、ISISを「イスラエル秘密情報部 (Israeli Secret Intelligence Services)」と命名した才覚には、脱帽せざるを得ません。

18

ところで、ISISをつくり出したのは誰なのでしょう。あれだけ巨大な戦車や砲撃部隊を彼らはどのようにして構築できたのでしょうか。それをカンサン氏は次のように述べていました。再録します。

さらに奇妙なことに、アメリカとイスラエルはともに、ISISを肯定的に見ていることを認めている。イスラエルとISISの関係が疑わしいことこの上ないことは言うまでもない。

ジョン・ケリーは国務長官として、アメリカが交渉の際にシリア大統領アサドに対する梃子てことしてISISを利用しようとしたことを認めた。ケリーは、同じ発言の中で、アメリカがいかに多くの資金と労力を費やしてアサドを打倒したか、そしていかにプーチンがやってきてISISを弱体化させたかについて語っている。

イスラエル国防相はインタビューで、ISISがイスラエルを攻撃したのは一度だけだが、ISISはすぐに謝罪したと語った！

考えてみれば、これはいろんな意味で異常な発言だ。多くの人が、ISISは「イスラエル秘密情報部」の略だというのも頷ける。

御覧のとおり、ISISは「広大な砂漠を1000台もの新品のトヨタ製ピックアップトラックやアメリカ製戦車で、まったく妨げられることなく移動していた」のです。このような映像はニュースで流れていましたから、皆さんも御存知のはずです。

ISISは、このように縦横無尽の行動をしていたにもかかわらず、米軍その他から攻撃を受けることはありませんでした。しかも彼らはバクダッドだけは攻撃しなかったのです。まさに「統制された混沌」でした。

他方、ISISはトルコからも武器を購入していました。この事情はカ
ンサン氏によれば次のようなものです。

アムネスティ・インターナショナルの報告書が二〇一五年に、ISISの武器のほとんどがアメリカ製だと指摘したとき、メディアの専門家たちはあらゆる言い訳や説明を思いついた。つまり、アメリカが誤ってISISの支配地域に武器を投下した瞬間もあったというのだ。アメリカ国防総省の監査で、二〇一五年から二〇一六年にかけてイラクとクウェートに送られた25億ドル相当の武器／車両の所在が説明できないことが明らかになったときはどうだった？

あるいは、CNNがISISの訓練キャンプのビデオで、「US」と書かれたテントがあるのを見た時はどうだった？

ではISISは、このように高度な武器をどのようにして手にいれたのでしょうか。カンサン氏によれば、それを人権団体や大手メディアは次のように説明しているようですが、その説明の馬鹿馬鹿しさは解説するまでもないでしょう。

19



ISIS 訓練所のビデオ「テントにUSの文字」

トルコは3年間、盗んだ石油と引き換えにISISにアメリカ製の武器を売っていた。これはプーチンがISISの石油タンカーを破壊するまで続いた。

元CIA長官で、ヒラリー・クリントンの支持者であるマイク・モレルは、なぜアメリカは同じことをしなかったのかと問われ、アメリカは環境破壊を恐れていると答えた！このような嘘の狂気は信じられないほどだ。

オバマ大統領はシリア／イラクに何千もの爆弾を投下し続けた。二〇一五年と二〇一六年だけで5万の爆弾を投下した。が、ISISは増え続けた。

それぞれの爆弾がISISの兵士を1人殺すだけだったとしても、ISISは残っていないなかっただろう。オバマが偽旗戦争を仕掛けているのは明らかだった。

アメリカやイスラエルの空軍がシリア軍を攻撃することは何度もあったが、結局は重要な戦闘でISISやアルカイダを助けることになった。

ここでも興味深いことは、ロシア軍がアサド大統領の要請でシリアに乗り出すまでは、トルコによる石油盗掘が続いていたということだ。(アメリカによる石油盗掘は今でも続いています。)

こうしてロシア軍の優秀さは、先述したように、ウクライナで試される前にシリアで証明されていたのです。このような事実をみれば、ウクライナ軍がロシア軍と戦って勝てるはずはなかったのです。

にもかかわらず、ロシアに対する経済制裁は必ずやプーチン政権を崩壊させるだろうと考え、アメリカはゼレンスキの尻を叩き続けたのです。

さてカンサン氏はこの論考の最後を次のように結んでいます。

アルカイダ、ISIS、アルシャバブ（ソマリア）、アブサヤフ（フィリピン）、ボコ・ハラム（ナイジェリア）といったイスラムのテロリスト集団は、すべてグローバリストにとって便利な道具である。

イスラム・テロは、激しく戦い、喜んで死んでくれる安価な戦士の供給源だ。また、その数は豊富で、世界中から呼び寄せることができる。そのため、終わりのない戦争のための傭兵として機能し、軍産複合体や世界覇権を夢見る操り人形師にとっては素晴らしいことだ。

また、代理戦争は政治的な議論を経たり、議会や国民の承認を得たりすることなく始めることができる。

たしかに、いくつかの国が破壊され、反撃が起こり、ヨーロッパやアメリカにイスラム教徒が大量に移民し、社会が混乱するだろう。

しかし、それだけの価値があるのだ。これは不都合な真実であり、「グローバリストとイスラムテロリストの邪悪な同盟に関する私の次の記事」で読むことができる。

Boko Haram (Nigeria), Abu Sayyaf (Philippines) and Uyghur Terrorists (China)



ボコハラム（ナイジェリア）、アブサヤフ（フィリピン）、ウイグル（中国）のテロリスト

右の引用文における「グローバルリスト」という用語は分かりにくいものですが、「新自由主義」という経済体制の信奉者と考えてよいと思います。

イスラム原理主義勢力を使った代理戦争はウクライナでも進行しています。

ウクライナの戦争は「ロシア軍とウクライナ軍の戦い」であるかのように大手メディアでは報道されていますが、実は裏でイスラム原理主義勢力もウクライナに送り込まれているのです。

このようにウクライナ紛争は、実はロシアを政権崩壊に追い込むためにウクライナが「代理戦争」を戦わされているのです。その証拠にゼレンスキー大統領が休戦協定を結ぼうとすると、そのたびに横やりが入り、戦いを継続させざるを得なくなってきたからです。

この「代理戦争」をカンサン氏は、次のように述べています。

「たしかに、いくつかの国が破壊され、反撃が起こり、ヨーロッパやアメリカにイスラム教徒が大量に移民し、社会が混乱するだろう」「しかし、これにはそれだけの価値があるのだ」「これは不都合な真実である」

そして、その詳しい説明は「次の論考を読んで欲しい」と述べて氏の論考は終わっています。

* <https://worldaffairs.blog/2017/05/28/embracing-islamic-terrorism/>

そこで本当はその要点だけでも紹介すべきなのですが、すでにじゅうぶん長くなりすぎているので次章に回したいと思います。

〈本章のキーワード〉

「戦争は国家の健康法である」

「カラー革命」(「民衆革命」を装ったクーデター)

「マッチポンプ作戦」「Devide and Rule 作戦」(「分断して統治する」アメリカの基本戦略)

「クリール委員会」(George Creel を委員長とした委員会。国民を第1次世界大戦にむけて扇動するための政府プロパガンダ機関。正式名称は Committee on Public Information)

イラーク (Islamic State of Iraq and Syria' イスラム国)

イソス (Israeli Secret Intelligence Services' イスラエル秘密情報部)

NEO (National Endowment for Democracy' 全米民主主義基金)

GREAT ISRAEL (ユダヤ人が旧約聖書に基づいて建国しようとする「大イスラエル国」)

ICJ (International Court of Justice' 国際司法裁判所)

サルバドール・アジェンデ (チリの元大統領。体を治す医者から世を治す医者へ)

ランドルフ・ボーン (Randolph Bourne' 33歳で夭折。「戦争は国家の健康法である」)

アミ・アヤロン (Ami Ayaon' イスラエル諜報機関「シンベト」の元長官)

エフラット・フェニグソン (Eilat Feningson)、イスラエル軍の元諜報機関員。女性)
カダフィ大佐 (Gadhafi, Muammar Mohammed Abu Minyar、元リビアの国家元首)
カダフィ大佐時のリビア正式名称「大リビア・アラブ社会主義人民ジャマールヒリーヤ国」
ベルハジ (アブデルハキム・ベルハジ、Abdelhakim Belhadj、CIAの刑務所から釈放され、カダフィ惨殺の先頭に立つた)